

第157回簿記検定試験 2級 出題の意図

[第1問]

(出題の意図)

本問は、取引の仕訳を求める問題です。5の取引を除いて、過去にも何度か出題されたことのある基本的な問題です。また、5の取引については比較的新しい出題範囲にかかわるものですが、内容的には基本的で標準的な仕訳問題です。

1は有価証券の売却取引です。端数利息の計算と処理が1つのポイントとなります。

2は手形の更改取引です。手形の更改に伴う追加の利息の取扱いに注意して解答する必要があります。

3は買掛金の期日前決済にかかわる取引です。支払免除額の処理が1つのポイントとなります。

4は建物の修繕取引です。修繕代金のすべてが費用として処理されるわけではないという点に注意する必要があります。

5は有価証券の決算処理にかかわる取引です。税効果会計の適用に伴う処理を正しく理解しているかどうか、1つのポイントとなります。

[第2問]

(出題の意図)

過去の出題の意図でも述べられているように、中規模以上の企業の経理組織においては、例えば、預金関係、有価証券関係、売掛金関係、固定資産（リース取引を含む）関係といった形で、担当者に分担させていることが多いようです。本問では、受験者がリース取引関係の担当となった場合を念頭に、資料として与えられた「リース契約一覧表」と「当期の取引」から、1事業年度に経験するリース取引についての重要な取引の仕訳を正しく作成することができるかどうかのスキルを問うています。

リース取引は、ファイナンス・リース取引とオペレーティング・リース取引とに分類されますが、本問では主としてファイナンス・リース取引の仕訳力を問うています。ファイナンス・リース取引の重要な取引は、一般的な2級商業簿記のテキスト等で解説されているように、利子抜き法では、取引開始日の会計処理、リース料の支払、減価償却費の計上、および支払利息の期間配分が含まれますが、それぞれの取引について必要な会計ルールの知識はいずれもの基本的なものばかりです。1事業年度を通じてリース取引関係の経理処理を任されたと想定した

場合には、これらをすべて理解していることが必要となります。リース取引の開始だけ、リース料の支払取引だけ、あるいは、支払利息の計算だけを担当するといったことは、まずないものと思われます。

問題文の資料の量が多いという印象を持たれたかもしれませんが、リース料の支払と減価償却費と支払利息の定額法による計上が年 2 回で、計算しやすい形で出題されている点に注意してください。重要な取引に関連する資料がどれかを考えながら、1 個 1 個の計算と仕訳を丁寧にやっていけば、正解に到達できる問題でした。本問では、リース契約の解約に関する処理も求めています。過去の仕訳問題（大問 1）でも出題されており、過去問を復習していれば、その応用で解答できることを期待して出題しました。

今回も、検定試験終了後に行われた受験指導校の Web 解説を視聴させていただきました。リース取引の問題が出題予想から外れて混乱したせい、1 級レベルだと断定し解き方もほとんど解説できなかつたケースもありました。上で述べた通り本問は計算量やや多めですが、内容は 2 級レベルの基本的なものです。多くの受験指導校は、資料を整理して集計し仕訳を 1 つ 1 つ切っていくのが、遠回りそうで実は早道であって相当程度の得点が可能であるという理解が概ねされているようでした。この種の問題は 1 度解いてみるかどうか、得点率に差が出ると思われ、指導者の方も、問題文の数値をそのまま解答用紙に転記すればよいといった仕訳の指導だけでなく、一定期間の取引を総合的に仕訳する指導をすると、受験者の実務対応能力の向上にも資すると思います。

なお、今回の出題について、リースの会計基準が今後変わるため無意味との解説が、いくつかの受験指導校で見られました。IFRS に沿った改訂が行われた場合には、「リース資産」の科目名が「使用权資産」に変わり、解約不能のオペレーティング・リース取引が併せて資産・負債に計上されるだけで、会計処理の枠組みが大きく変わるわけではありませんので、そのような解説は不勉強による思い違いで受験者を誤導すると思われます。

【第 3 問】

（出題の意図）

本問は、製造業を営む会社の決算処理を出題しました。この分野が「出題区分表」に加わって以来、初めての出題になります。そのため、サンプル問題 15 の形式をほぼ踏襲しています。ただし、サンプル問題 15 は貸借対照表を完成し、区分式損益計算書で表示される利益の金額を求めています。今回は損益計算書を完成し、貸借対照表に表示されるいくつかの項目の金額を答えさせる形式を採っています。

本問は、商業簿記の知識だけでなく、工業簿記の知識も動員して解答することになります。その意味では商業簿記と工業簿記の融合的な問題ではありますが、[資料2]の指示に従って20X9年3月中の取引と製造業特有の決算整理事項を処理することを通じて本質的な理解ができているかを問うています。解答にあたっては勘定連絡図を思い浮かべながら仕訳を切ることがポイントとなるかと思えます。

また、本問ではサンプル問題15にはない論点も含まれており、その結果としてボリュームが多くなっていますが、製造業以外の論点を出題することによって、試験範囲から満遍なく出題するとともに、製造業の分野が苦手もしくは手薄な受験者であってもある程度得点できるようにする意図で出題しました。

[第4問]

(出題の意図)

本問は、個別原価計算の費目別計算における仕訳の基本問題です。問題で示された取引の内容に従って仕訳を行うこととなります。このとき、一連の取引については、費目別計算として学習する、材料費、労務費、製造間接費のそれぞれの計算手続きにより、各問題について、その金額を計算し、指示された勘定科目の中から、最も適切な科目を選択して、仕訳として解答することとなります。

本問のような個別原価計算に関する一連の取引の仕訳は、工業簿記の全体的な仕組みを理解するために、その基礎的な入り口として、学習が必要不可欠な会計手続きです。この仕訳を通じて、その後の原価の計算に至ることとなるため、十分な学習をして欲しいと思います。残念ながら、全体的な傾向として、学習が敬遠されがちなところありますが、その学習が重要であることから過去に何度も出題されています。そのため、今回も工業簿記の基礎を理解しているかを確認するために本問を出題しました。

[第5問]

(出題の意図)

標準原価計算からの出題であり、仕掛品勘定と製品勘定を完成させる問題でした。どちらも工業簿記に特有の勘定となります。工業簿記では、勘定と勘定のつながり(勘定連絡図あるいはコストフロー)を理解しておくことが重要であり、それは実際原価計算でも標準原価計算でも変わりません。今後とも、単に計算ができるというだけでなく、勘定と勘定のつながりを意識して学習してほしいと思います。

仕掛品勘定の作成方法には、シングルプランとパーシャルプランがありますが、今回はシングルプランのほうを出題しました。どちらの方法でも、仕掛品勘定の借方には、材料勘定や賃金・給料勘定からの振替額が入ります。シングルプランでは、その振替額が標準原価で計算されることとなります。この点についても、勘定と勘定のつながりを意識しておくことで理解が深まるでしょう。

財務諸表の作成は標準原価計算の主要な目的の 1 つです。この目的を実現するうえで、標準原価が勘定記録のなかに組み込まれていることは非常に重要なこととなります。また、原価管理や予算管理といった標準原価計算のその他の目的を考えると、標準原価が勘定記録に組み込まれることが前提条件・制約条件になることを理解しておきましょう。